

豊明希望チャペル礼拝

2025/1/5

「神の摂理への忍耐」

使徒 7 : 17~43

(主にあって改めてご挨拶申し上げます。「あけましておめでとうございます」)

さて、2025年最初の主日のメッセージの題を「**神の摂理への忍耐**」としました。前回からステパノの説教に入っていますが、それは、前回と同じく、ステパノの説教全体のテーマであります。

他にも色々と語らせていただきましたが、今日は、このテーマに集中して教えられたいと願っております。

すでに長い箇所を読んでいただきましたので、今日は、その箇所を読むことはしませんが、まず、20節までは、前回のヨセフの続きの話です。

(7 : 17~18)

アブラハムは、星の数ほど子孫を増やすと神様から約束された。確かにモーセによって、エジプトを出る頃には60万人に達していました。しかし考えると、イスラエルの約束のまさに安住の地にいたときには、アブラハムからエジプトに移るまでに増えたのは75人で、その間約200年だということです。そして、奴隷となって、苦しみの中に置かれた時代の出エジプトの時までが、次の200年で、60万人に増えたということです。出エジプト記のはじめに、イスラエル人は多産(たくさん子供を産む)であったので、おびただしく増えて・・・地に満ちていったと書かれています。

祝福されていたと感じていたときには、あまり大きな神の恵みを見ず、むしろ、ふり返ってみると、イスラエルが、一番苦しかった時代こそ、75が60万人となった。実に8000倍の祝福があったということです。ステパノはこの事実ユダヤ人の目を向けさせようとしています。

ここには、前回同様のメッセージが、一貫しています。神の摂理に、地道に、あきらめずに、委ねて忍耐するという信仰の姿勢です。いくつかの強調点にまとめることが出来るかと思えます。

- 1、早合点をして人間的な解決を急がないこと(キリストを十字架について問題は解決したと思ったこと・・・)
- 2、出来事、歴史の背後に神の計画を見抜く(あるいは「信じ委ねる」)ということです。

逆に言えば、待てない、委ねられない、祈らないは、信仰生活にあって禁物だと言うことです。

(7 : 19～35)

二つ目の、神の計画への忍耐について教えられているのは、**モーセ**についてです。

今日の中心聖句である、この言葉をまず引用します。

「7:35 『だれがおまえを、指導者やさばき人として任命したのか』と言って人々が拒んだこのモーセを、神は、柴の茂みの中で彼に現れた御使いの手によって、指導者また解放者として遣わされたのです。」

モーセは、神から、任命を受けて、大きな、まさに歴史的な神の救済の事業を命じられます。その使命の大きさは、とんでもないものでした。エジプト王国から、ユダヤ人をすべて救いだせというのです。

ステパノはあの出エジプト記の記述に一つの強調点と解釈を入れます。

「**人々が拒んだこのモーセを、神は、指導者また解放者として遣わされた**」ということですが。

もちろん、ここには、神の助け、神の預言者を拒むのは、ユダヤ人の専売特許だと、性質だとでもいうがごとく、ずっとそういう人間的な浅はかな考えしか持てないのが私たちであるが、しかし、神は、そのことを承知の上で、助けを差し向けて下さったとステパノは言っているのです。

ここには、歴史は見えるところだけ見えてもわからない、その背後に神の御手を見なければ、本当のことはわからないということでもあります。

すなわち、繰り返しますが、神は、モーセにも、この**神の摂理への忍耐**を求めたとステパノは言っているのです。

そもそも、モーセは、ユダヤ人としての自覚を捨て、神への信仰もエジプトの神々を拝む信仰に切り替えていたら、どれほど、人間的な出世したことでしょう。

伝承によれば（ヨセフス）、娘はモーセを次の王にして欲しいと言います。パロは承知しまして、王は幼子モーセの頭に王冠をかぶらせませす。モーセは王冠をぐいとつかみ、それを床に投げつけます。王女は必死に赦しを請うたとか。モーセは成長してエチオピア軍と戦い勝利し、王女と結婚します。揚々（ようよう）たる前途（ぜんと）が約束されていました。40歳になって、地位を得て、自分はこの苦しめられているイスラエルの同胞のために、神さまのために、何かが出来るはずだと考えます。

人間的に見たら実に愚かに見えるのです。結果的に、彼は、この決断をしたおかげで、エジプトから逃亡し、その地に40年。80歳になりました。

ああ、あのとき、もうすこし人間的な賢く振る舞っておけば、たとえば、それで、エジプトの王になっていたら、そこまでなれなくても、大臣になってヨセフのように信頼を得れば、ユダヤ人をイスラエルの地に戻すのに、もっと良い方法だったかも知れない、今や、80歳、何も出来ない年齢になってしまった。あれは、間違った決断だったのか？

しかし、ここにこそ、まさにモーセの神の摂理への忍耐が求められたのです。

歴史は、人の賢さではなく、神の摂理による。そのことをモーセ初め、イスラ

エルは学んだはずだとステパノは言うのです。



全国、全世界に、牧師宣教師を送り出す聖書宣教会で、非常勤講師として、7年間教えさせていただいた経験があります。

そのおかげで、毎年、卒業式に出席し、赴任先の決まった聖徒たちの証の時、交わりの時をもつ経験をさせていただきました。

卒業式で共通して聞かれるのが、自分の弱さを思い知らされた、自分が実は何も知らない、いや、自信をもって入ってきたけれど、神学校に入って、4年間学んで、かえって自信を失ったと言う人もいます。世の中であれば、時々考えたのは、これって、学校を卒業するときに言う言葉ではないかも知れないと思うのです。就職の時、自信がないなどと公言する人を会社に雇うでしょうか？

ある人と話をしていました。それは、20年前の就職難の就職事情について話したときです。昔なら、性格のいいのが選ばれた、しかし、今はとにかくやれそうだと出来そうだと、即戦力になりそうだという人物を選ぶようだ。しかし、ひるがえって、クリスチヤンのことを思うと、神様は、どうも、即戦力にもなれそうもなく、正確も疑問符が付く、たとえば、4年学んでも、自信のないやつを選ぶ。むしろ、自信を失った人を選ぶんだね。特に牧師の場合という話でした。

しかし、これこそ、神さまが人を導き、真に神の御心に歩み、神に委ねて、神からの命令を忠実に実行するクリスチヤンの選び方なのだと言うことです。

18節までのところで、神の摂理に委ねて忍耐するという生き方を、別の言い方でこのように言いました。今一度確認したいと思います。

- 1, 早合点をして人間的な解決を急がないこと(キリストを十字架について問題は解決したと思ったこと・・・)
- 2, 出来事、歴史の背後に神の計画を見抜く(あるいは「信じ委ねる」)ということなのです。

人と比較せず、自分が正直に見えて来たときこそ、神に頼れると思ひ直すこと。そのことであります。

小さな証ですが、ふとしたことで、そのことをしみじみと知る事があります。



牧師は、兄弟姉妹が地方に行かれると、一番、聞かれることは、どこの教会に通ったらいいかということなのです。

洗礼を受けたばかりの兄弟が、聖霊浜松病院に就職することになりました。関東にいた時は、だいたい、内容が想像出来るものでしたが、中部地方のことは、当時は、まったくわかりませんでした。年鑑で調べましたが、浜松には20以上の教会がありました。その一つ紹介しました。

当時、私の娘(長女)が、島根にあるキリスト教の全寮制の高校に入ることになりました。娘も、4月に入学することになって、島根の学校の入学式に出席しました。そしたら、そのときに、「あれ、林先生、おたくの教会の兄弟を商科敷いていただいた浜松福音教会のYですよ。うちの子も、ここに今年から入学するんです。」中部地方には、知り合いはいないはずでしたが、いきなり、知り合いになってスタートすることになりました。神の不思議な導きを感じましたね。

(7:36~43)

日本で本当に最初のクリスチャンであり牧師である、同志社大学創立者の新島襄が、信仰者の歩みを思いながら、またクリスチャンの生き方を思いながらこんな詩を読みました。それは、当時ですから、漢詩なのですが。



「庭上一寒梅 笑侵風雪開 不爭又不力 自占百花魁」

庭(てい)上の一寒梅(かんばい)、笑うて風雪を冒して開く、争わず努めず、おのずから死ぬ。百花の先駆け」というのです。意味は、梅の花は強いので、気温はマイナスの寒さの中で白い雪の綿帽子の中からも咲く。風や雪にも負けないで、その厳しさに負けないで、しっかりと花を開く。しかも、笑うて(笑って、何事もなかったかのように)開く。争わず(誰かと競争をするのでもなく)、努めず(肩肘張らず)おのずから咲き、命を全うする。しかし、それは、すべての花々(百花)の先駆けとなるのだというのです。

桜などとくらべると梅は実に質素だというのです。目立たない。

それは、人の生き方を投影して見ているのです。もちろん、クリスチャンとして聖書に生きる彼は、それは、聖書の価値観だと言うことが良くわかります。

「ひと見るも良し。ひと見ざるも良し、われは咲くなり」という詩があります。数多くある花の中には、目立つところで咲き、人々からもてはやされる花もあり、



例えば桜、しかし、そんな花に比べれば梅の花はどこか地味でひっそりしている。また、ひっそりと庭の片隅や野に咲く花もあります。ひとさまがほめてくださる時には、すなおに喜んだらいい。でも、目立たない存在であり、または目立たない立場に置かれるような日々であっても、「我は咲くなり」「私は咲いています」と言い切りうるような人生。誰の目を気にするのでもなく、**神の前に、しっかりと咲く。**時には、ただ苦しく目立たない人生で、意味がないような歩みに思われるけれど・・・結果的に、人々に大きな影響を残しうる、私がではなくて、神がそのように導いてくださる。だから、私は、私はただ、神の恵みの中を無理をせず、人と争うのでもなく、しっかりと神の恵みの中にとどまって生かされていこうと。

新島襄は、明治よりさらに 25 年さかのぼり江戸時代天保年間、1843 年に群馬県安中藩の家臣の子供として江戸に生まれます。彼は中国語で書かれた聖書の抜粋を手にし、「神が天地を創られた」その雄大な教えに打たれます。彼は、もっと聖書を読みたいと願います。函館に行けば多くの外国人と会えると聞きます。父親にうち明けると、まだキリシタン禁制の時代です。身の破滅だと言われムチで打たれます。しかし、彼は、ついに函館にわたり、上海行きの船に密航します。そして、時を経て、不思議な神さまの導きの同志社大学を開学します。

今週の歩み、私たちは、新島襄のようには行かないかも知れない、「庭上の一寒梅、笑うて風雪を冒して開く、争わず努めず、おのずから死ぬ。」というほどに、何も気にせずこの道を行くというほどに信仰において達観していないかも知れない。

でも、神様が、私たちをいつも慈しみ、愛し、花を咲かせてくださると信じ、安んじて神にゆだね、忍耐強く神に委ねて歩む歩みとさせていただきます。